

# 教務だより

2012年1月号  
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

## 新しい年、入試が始まる！

茗溪塾塾長 宇野雅春

年明けと同時に、入試が始まりました。「受験生に正月はなし」の言葉通り、冬期講習、正月特訓から休みなしに、中学入試最初の全寮制、埼玉県の「入試」がスタートしています。ここは風邪などひかないように、十分体調に気をつけて受験をやりきってほしいと思います。1月8日(日)に大学受験部は、「茗溪模試」を行いました。朝早くから、夜まで受験生が集まり、センター試験に向けた最後の「模試」を行いました。今までの成果が問われる、一年で最も厳しい時期がついにスタートしたということです。受験生の表情も真剣そのものでした。

昨年も、同じような出だいで、この教務便りを書いていました。でも、今年は去年とは決定的に違うことがあります。昨年の受験が終わって新学期が始まった「3月」にそれは起こりました。2日後に、それぞれ受験を終えた中学生高校生達の卒塾式がありました。電車が止まってしまい、ひたすら歩いて帰宅したときのことなど今でも思い出します。余震の続く中で、「卒塾式」をどうするか？が問題になりました。会場も押さえてあります。電車も不安定な状況です。「中止」が当然のように思えました。

その時、2つの流れが世の中にはあったように思います。ひとつは、特別な事態に安全を優先して、すべて休止するという流れです。もう一つは当日の「都営新宿線」がその日の午後10時には動いたように、平常を何とか取り戻そうという流れです。明らかにこの2つが、同時進行的に、問題を突きつけてきました。塾長としてどうするのか？が全ての課題で問われてきたのです。「今日の授業は？」「補習は？」「生徒の安全は？」「停電した場合は？」そして「卒塾式は？」という具合に…です。

卒塾式は、全校の意見をFAXを使って○×で確認しました。また、会場として借りていたホールの方に電話をしました。「休業」で使用不可といわれると思ったからです。意外な返事が返ってきました。「この状況ですから、キャンセル料はいただきませんよ。」というものでした。「やっても良いんですか？」というのが正直な気持ちでした。それなら「やろう！」という気持ちになったのはいうまでもありませんが、決定づけたのは、ユウカリが丘教室の教室長のFAXの端のメモでした。「こんな時だから、やるべきではないのか！」というものです。平常を取り戻していこうという流れです。

結果、一票の差で実施が決まりました。その時はまだ津波の被害は正確に把握されておらず、死者・行方不明者1000人くらいといわれていたと思います。約2万人という数字が出るのはまだ先のことです。塾の方向性としてこの日以降、とにかく平常をやりきるという「決意」が生まれました。計画停電や「保護者の不安」などにも応えられるように工夫と万全を期しました。夜の遅い時間帯を避けながらも、時間数を確保するように各教室が頑張りました。

卒塾式で卒業生に向けて出た言葉は、自分でも思ってもいない言葉でした。「自然災害と戦い続けるのは、人類の宿命、まだまだ不完全な社会の前に、学問はより必要」というようなことだったと思います。平常に戻すだけでは不完全です。そこから問題解決を行っていかなくてはなりません。こんな年に、「受験」を迎えた受験生は、真剣にそこに立ち向かってほしいと思います。いろいろなことを考えてしまうのも、多分「大きな出来事」があったからだだと思います。でも考えているだけでは、何も出来ないものです。まずは自分の事をきちんとやること。元通りにするための努力って辛い…。その先を見て前に進める日がはやく来てほしい…。今多分多くの人が感じていることではないかと思えます。

受験生が無事「受験」することも、平常であることの証です。そこから、受験生の未来が必ず広がっていくはずです。健闘を祈ります。